

中国史を題材とした講義形式授業の方向性

社会科教育・矢澤 知行

1. 授業の形式

本授業は，教育学部・学校教育教員養成課程における1年次前期配当の講義形式の授業である。

授業の目的は，「中国」の特質をさまざまな歴史的側面から考察し，それによって世界史理解への扉を開くことに置かれている。また，到達目標として，中国史上の具体的な事象について知識と理解を深め，説明することができることや，中国史を世界史の文脈に接続させて考えることができることなどを掲げている。

本授業の受講登録者は計41名である。その中心は学校教育教員養成課程・社会科教育専修の1年生であるが，他専修や総合人間形成課程，2年生以上の受講者も含まれている。その内訳は次の通りである。

学校教育教員養成課程1年生・・・19名  
総合人間形成課程1年生・・・・・・15名  
2年生以上・・・・・・・・・・・・・・7名

2. 授業の内容

授業の内容は，主に次の3点から成り立っている。

- ①中国の歴史的特質，とりわけその開放性と閉鎖性などの問題を考察する。
- ②古代から現代に至る中国の歴史を概観する。
- ③中国史を世界史の中に位置づけて考察する。

全15回の授業のうち，前半部分では，“「中国」とは何か？”という問いを設定し，主に上記①の点に留意しながら，「中国」の歴史的特質を考察することに主眼を置いている。一方，後半部分では，上記②のような具体的な歴史事象について論じている。そして，授業全体を通じて，上記③の点，すなわち隣国中国の歴史をひもとくことによって世界史への理解を深めることを心がけている。

これら一連の内容は，個人と社会，国家の

かわり，「普遍」と「個別」のありかた等，人文社会科学の根本的な問題と密接につながっており，教員養成課程のカリキュラムにおいて欠かせない視点を提供するものと考えられる。

なお，授業の具体的なスケジュールは次の通りである。

1. 問題提起「中国とは何か？」
2. 中国というまとまり
3. 地理的空間としての中国
4. 多民族国家としての中国
5. 「中国」「中華」の概念
6. 近代「中国」ナショナリズム
7. 中国社会の特質
8. 中国史概観（1）先秦時代～秦漢
9. 中国史概観（2）三国～魏晋南北朝
10. 中国史概観（3）隋唐～宋
11. 中国史概観（4）遼金元明清
12. 中国史概観（5）近現代の中国
13. 世界史の中の中国（1）前近代
14. 世界史の中の中国（2）近現代
15. 試験

3. 授業公開

2008年6月13日（金）の5時間目（16:30～18:00），教務委員会のFDワーキンググループの主催による授業公開を行った。授業公開への参加者は，指定参加者も含め，計5名であった。

公開に供したのは，本授業の第8回の単元「中国史概観（1）先秦時代～秦漢」であり，授業で取り上げたトピックは，およそ次のような諸点である。

1. 中国の先史時代の概要
2. 夏王朝研究の現状
3. ト辞史料の講読による殷代の政治構造の再構成
4. 周代の封建制度の仕組み
5. 春秋・戦国時代における（邑制国家から）領土国家への展開
6. 秦の台頭の原因

## 7. 始皇帝の人物像と彼をとりまく人物 相関関係

授業は講義形式で行い、必要事項を板書しつつ、図像資料についてはパワーポイントを用い、ト辞史料テキストや関連地図については紙媒体の資料も配付した。

## 4. カンファレンス

授業終了後にカンファレンス（18:00～18:45）を行った。

カンファレンスでは、授業の構成や内容に関する基本的な質問が寄せられたほか、次のような意見が出された。

- ① 非常に長いスパンの歴史の流れを、とてもコンパクトに効率よく伝えられていた。
- ② 新しい史実の紹介もあり、とてもエキサイティングな内容だった。
- ③ 資料や地図、写真などビジュアルな形で古代のイメージが想像できた。

一方で、いくつかの問題点や提言も出された。

- ① 学生が授業を聴きっぱなしになるとしたらもったいない。授業の内容に即した参考文献などを紹介し、後で復習をさせたほうがよいのではないか。
- ② 一回の授業に盛り込まれている情報量がかなり多い（多すぎる）。
- ③ 中国の歴史を単に概観するのではなく、特定のテーマや視点を設定し、それにもとづきながら概観するという方法もあるのではないか。

まず、①の点については、今後、積極的に採り入れていきたい。これまでも、授業の要所で、中国史関連の必読書を紹介することはあったが、これをもっと充実させ、例えば、初回授業時に参考文献リストを提示することも検討したい。

次に、②の点については、情報量を厳選して、もっとゆとりを持たせた授業内容にすることも考えられる。しかし、全15回の授業スケジュールのうち、後半部分の中国史概観が、教員採用試験を意識して、中国史に関する一定の知識を盛り込んだ構成となるよう心がけている旨を説明した。これに対し、大学の教科専門の授業において教員採用試験を考慮する必要はないとの意見もあったが、昨今

のいわゆる“世界史未履修問題”とも関わるためか、受講生のうち、高校時代に中国史を学んでいない学生が約三分の一を占めていることもあり（初回授業時にアンケートを実施して判明）、現時点では、“中国史の流れ”を把握してもらうためにも、数多くの史実を紹介するのが適当と考えている。

③の点については、次年度以降、工夫を試みたい。具体的なテーマとしては、例えば、“農民反乱”、“官吏登用制度”、鉄や塩といった“モノの歴史”、中国史上の“女性”、“日中交流の歴史”などが考えられる。学生たちの関心の所在を確かめながら、今後授業の構成を再検討していきたい。

## 4. 総括と今後の課題

上述のように、本授業の主眼は、中国の歴史的特質と中国史上の具体的な歴史事象を理解することに置かれている。しかし同時に、受講者には、個人と社会・国家のかかわりといった、より大きな人文社会科学上の重要問題も視野に入れつつ考察を深めてほしいと願っている。

半期という限られた時間の中で、それらの要件を十分に充たすことは困難であるが、今後も授業上の工夫を続けていきたい。例えば、配付資料や視聴覚資料の工夫の余地もあるし、また、学生からの発話を引き出したり、予習・復習を実質化させたりすることもできよう。筆者が担当する他の教科科目（外国史Ⅴ、Ⅵ）との関連性・連続性にも検討の余地が残されている。これらの課題を見据えつつ、牛歩を続けていきたい。